88

『（獅子流秘本）西村鍼灸秘録』について

岩田源太郎
日本鍼灸研究会

『（獅子流秘本）西村鍼灸秘録』（以下『鍼灸秘録』）は，江戸期の鍼灸流派の一つである西村流の鍼灸書である．西村流は江戸前期より明治年間まで継続した著名な流派であるが，その業績はあまり知られていない．よって，本書の内容を検討し，江戸期鍼灸研究の一助とする．

『鍼灸秘録』の唯一の伝本は森田蒿英所蔵の写本に基づき昭和13（1938）年に皇漢医書伝写会から刊行された油印本で，本文19葉からなる．近年，『続鍼灸医学諺解書集成』第6冊，『臨床実践鍼灸流儀書集成』第4冊に油印本の補写本が影印されている．

伝本には著者名や序跋がないため，成書については不明であるが，書題に「獅子流」「西村」などの文字があり，また清水正健編『（改訂）水戸文籍考』（以下，『文籍考』）の「西村元春」の項目に「鍼灸秘録．一冊とあり．承応二年成る」とあることから，水戸藩の鍼医であった西村元春の著作で，成立は承応2（1653）年と推定される．なお油印本の標題紙にも「西村元春先生原著」とある．

西村元春は，『文籍考』並びに『西村元春先生没後三百年記念式典記念誌』によれば，慶長16（1611）年あるいは元和6（1620）年の生まれ，延宝3（1675）年に水戸藩の侍医となり，元禄11（1698）年に78歳（あるいは88歳）で没した．『文籍考』には「諱を維宜と云い，通称を元春と呼ぶ」とあり，また同書所引の『桃源遺事』には「西村元春と云う扁鵲流の御針医」に，西山公（水戸光圀）から「獅子の針の事，年来聞き及び候あいだ，粗針医共に相尋ね候えども，しかと存じ候者これなし．其の方は存じ候哉」との下問があり，これに元春が滞りなく答えたとの記事が見える．なお元春は，もと尾張名古屋の人で，11歳頃より長崎の人である沢田意春に師事した．この沢田意春が師事したのが長崎に渡来した扁鵲流の流れを汲む明の鍼医であったという．ここから，元春が『桃源遺事』で扁鵲流と書かれている理由が理解できる．

『鍼灸秘録』は，31病門，歌賦1，四肢刺法1の全33門で構成されている．各病門は，病證の簡単な説明，配穴からなる．また病門の題下や文中に割注が附されている．施術は鍼灸が併用されており，鍼法は，毫鍼による補瀉と三稜鍼による瀉血，灸法は，3，5，7，100，随年壮の指示がある．配穴については，基本的に穴名のみで，鍼灸いずれの施術を行うかについては指示されていない．だが，時に，鍼法であれば補瀉，瀉血，刺入深度，留鍼，呼吸数が指示され，灸法であれば壮数が指示されている箇所がある．取穴法は，十四経に属する穴については省略されているが，奇穴については，穴名の下に割注で記されている．

本文中に見える引用文献は，『類経』『類経図翼』『千金方』『千金翼方』『医学綱目』『乾坤生意』『原病式』『鍼灸聚英』『鍼法文集』『鍼灸大成』『居家秘要』『寿世保元』『医学原始』『（鍼灸）大全』『甲乙経』『天星秘訣』『東垣全書』の17書目，人名は，「張介賓」「劉宋厚」「秦承祖」「徐嗣」の4名が見られた．特に『類経』『千金』からの奇穴条文の引用が多く見られる．以上のことより，『鍼灸秘録』は，明代鍼灸の影響を大きく受け構成されていることが伺える．また，内容から見て，本書は治療提要的な意図をもって書かれた可能性も考えられる．

なお，今回は未確認であるが，京都大学富士川文庫所蔵の写本『鍼灸秘録』（シ・531）は，本書との関連が考えられる．今後の検討課題としたい．